

『聊齋志異』：清初の寓意小説

阿部，泰記
九州大学文学部：助手

<https://doi.org/10.15017/9789>

出版情報：中国文学論集. 6, pp.22-31, 1977-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『聊齋誌異』——清初の寓意小説

阿 部 泰 記

【聊齋誌異】は清初康熙年間に山東省淄川県の蒲松齡（字留仙、号柳泉居士。崇禎13・一六四〇～康熙54・一七一五）が著わした志怪書である。この書は今日では人情の委曲を尽した作品として評価が定まっている。例えば魯迅の『中國小説史略』では次のように言う。

描写委曲、叙次井然。用伝奇法、而以志怪。變幻之状、如在目前。

しかしこの作品が情を否定する反世俗的な寓意小説としての面白さを持っていることについて、従来指摘されはしなかった。この小説は、志怪という荒唐無稽な叙述法によって、故意に常識をくつがえそうとする傾向があり、常識では考えられない、豪胆で忍耐強い人間像を創造することに努める。

こうした傾向は、この小説だけに見られるものではない。同時代にあつて李漁の『十二楼』『無声戯』という滑稽小説が誕生していた。『聊齋誌異』は志怪書ではあるが、まさにこの李漁の反世俗の志向と軌を一にする。恐らく『聊齋誌異』は、『十二楼』『無声戯』の影響を受けて生まれたのであろう。

特に清初においてこのように寓意小説によって常識の否定が行なわれるわけについてはなお検討の余地があるが、清初動乱期の、形

式的な道德の通用しない無情な時代にあつて、庶民と同様の辛酸を嘗めた、かれら無官の作者たちの苦悶の表われをそこに見ることができるよう思う。

一

志怪書『閱微堂筆記』の著者紀昀（字曉嵐、直隸獻縣の人。雍正2・一七二四～嘉慶10・一八〇五）は、『聊齋誌異』の文体が、志怪小説と伝記のそれを混同しており、その上男女の睡まじいことばや嬌態を細かく描写しているのは、才子の筆であつて著書者の筆ではない、と非難する（乾隆58年、盛時彦の跋文中に見える）。確かに紀昀が指摘するように、この小説は従来志怪とは異なり、人間界のことを記したかと思えば、鬼物のことを記し、また道德にはずれる人情描写を行ない、常識では考えられないほど荒唐無稽を尽す。学者紀昀はそれを嫌ったが、私はその故意に常識を破ろうとする志向が何故に発生するのか、文学史と作家の生き方とを参考にして検討してみたい。

まず『聊齋誌異』中の若干の話を記し、その内容がどのように反世俗的であるのか説明する。

〔青梅〕（巻4）程生は磊落で寛大な性格の人だった。ある日狐

と狎れ親しみ、女子が生まれる。その後程生は他人の言に惑わされ、狐を裏切って他の女性と結婚したため、狐は怒って彼の下を去る。程生は間もなく病死し、彼の妻は再婚する。さて狐の娘青梅は叔父の下に預けられるが、叔父は無頼漢であり、青梅を売り飛ばす。青梅は王進士に買われ、その娘阿喜の侍女となる。ある時青梅は、阿喜に村の孝行者張生との結婚を勧めめる。阿喜は初め彼が貧乏なことを嫌っていたが、青梅の説得で、父母にその旨を話すと、父母もその貧乏を嫌い猛反対する。そこで青梅は自ら張生に会い求婚する。張生は初め断わるがその真剣さに感動して、婚約を了承する。阿喜は青梅の淫奔な行爲を怒るが、やはりその真剣さに打たれて、結婚資金を援助する。夫人は青梅が結婚するという話を聞き、娘を唆かす侍女がいなくなるのを喜ぶ。さて青梅は嫁入後大いに家政を治めたが、後に張生と共に他所へ転居することになり、阿喜との別れに際し、恩は決して忘れないと誓って去る。一方王進士も他所へ移るが、夫人は亡くなり、自らも政治事件に連坐して生活に窮し、病死する。阿喜は郷紳の女としての誇りを持っていたが、生活の窮迫には勝てず、仕方なくある男の妾になる。しかし正妻の嫉妬に会って家を追出され、尼寺に寄寓する。寺には常に無頼が調戯に押しかけて来るが、尼の手で辛うじて守られる。さらにある女好きの貴公子に目をつけられたため、阿喜は自殺を決意するが、夢に亡父が現われ、昔自分が貧賤によって人を見ていたことが誤りだったこと、死ぬ時期を少し延ばすことを告げて消える。するとその三日後に大雨が降り、ひとりの麗人が雨宿りに尼寺に立寄る。思いがけぬことにその女性には青梅だった。彼女の夫は高官に出世しており、青梅は阿喜を家に招いて正夫人の座につかせる。

この話では、貧賤によって人を見る世俗の常識が全く頼りにならぬことを説く。阿喜ら親子は郷紳という高い身分を持ちながら、常識をもって人を見たため地獄の苦しみを受け、その反対に青梅は侍女という賤しい身分でありながら、人物の良否を識別する賢さを持っていた。また彼女は世俗から淫奔という譏りを受けながらも家政を治め、そして自分が高貴の身分になっても恩を裏切ることにはなかつた。しかもここで青梅は普通の人間ではなく狐の娘である所に、人間への皮肉がこめられている。

〔小翠〕（巻7）王太常はある時雷を避けて家に身を寄せた狐を助ける。彼はやがて進士に及第し、侍御に陞進する。ところが彼の息子は白癡で誰も求婚者がなかつた。そこに美しい娘を連れ来た婦人が現われ、娘小翠を公子の侍女として仕えさせたい、と言って娘を置いて去る。別れに際して母娘は涙ひとつ見せなかつた。さて小翠は非常に賢かつたが、何故かいつも公子と戯れてばかりいて、夫人が注意しても止めない。時に町内に同姓の王給諫という者があり、公を妬んで中傷の機会を探っていた。そこで小翠は権勢ある首相に変装して王家の門前に行き、大声で、王侍御の家と間違えた、と叫んで帰宅する。公はそれを知り、彼女の戯れの過ぎるのを怒るが、女はただ笑ってばかりいて弁解しようとしなない。一方王給諫は首相こと小翠の言葉を聞き、公が首相と親密であると思ひ込み、公を恐れるようになる。翌年首相が免ぜられ、その首相から公に宛てた私信が誤って王の下に届く。王は中傷の時機を得たりとすっかり喜び、公の家に口止めの賄賂を求めに訪れる。その時公は礼服を捜すのに慌てていたが、小翠は公子に天子の冠服を着させて押し出す。王は驚くが、中傷に絶好の機会とばかり、公子の着ていた冠服を奪って公

の家を去る。公は小翠の不用意な行動に激怒するが、小翠は笑って、事の責任は取ると言う。さて王給諫は前に得た冠服を証拠に、公の不軌を上奏する。しかし役人が実際に調べてみると、その冠服はわらと破布でできた玩具であり、屋敷内にもばかな公子と気違いの嫁がいるだけであった。かくて王は誣告罪で遠方へ流されるはめになる。そこで始めて公は女の智慧に感服する。ところで公は孫が欲しかったが、公子は夫婦の事も知らず、その望みも空しかった。そこで小翠は、こんなばかはいない方がましだ、と言って公子に熱湯を浴びせる。夫人は大騒ぎをするが、やがて公子は息を吹き返し、罕に見る美青年に生まれ変わる。その後、小翠は家宝の壺を壊して公の叱咤を被る。そこで、自分が昔公の恩を受けた狐の娘であり、公を助けるためにどんな唾罵にも堪えてきたのに、わずか壺を壊した位のことでは何故怒るのか、と言って家を飛び出す。公子は非常に悲しむが、再び二年後に会う。ところが小翠は、自分は子どもができないと言ひ、しきりに別の女性との再婚を勧める。そして彼女の顔は次第に変わってゆく。公子の再婚の日に彼女は姿を消すが、驚いたことに、新妻の顔は小翠の変えた顔に瓜二つだった。

この作品も徹底的に常識を破ることをねらいとしている。ひととき宿を借りたぐらいで狐はその娘を白癡の男に妻わずのを厭わない。また小翠はその愚かさによって人の中傷から身を守り、無慈悲な行爲によって公子の白癡を直し、さらに無情な言動でもって子供のできない自分を公に忘れさせ、顔を変えることによって公子に自分を誦めさせた。一方王給諫は人を中傷しようとするほど逆に自分自身を破滅に追い遣った。また、小翠が人間ではなく狐であること、王給諫が奪った天子の冠服がわらと破布に変わっていたこと

と、王侍御と王給諫が同姓であること、小翠が公子に自分を忘れさせるために顔を変えること等の滑稽な叙述にも、常識を茶化す作者の反俗精神がよく表われている。

〔細柳〕（巻7）士人の娘細柳は人相見を得意としていたが、年は十九になっても結婚しなかった。両親は怒るが、彼女は運命だと言つて聴かない。そして寡夫の高生の後妻となる。彼女は高生の前妻の子長福を寵愛した。やがて彼女も男児を生み、長估と名づけた。細柳は家政を上手に治め、次第に家は豊かになる。ある時彼女は高生のために棺材を買う。高生はその愚かさを笑うが、翌年彼は落馬して死に、そこで人々は始めて細柳の賢さを讃える。さて前妻の子長福は矯情で勉強をせず、いくら叱つても聴かなかった。そこで母は子の放恣に任せ、奴僕と共に労働させる。やがて長福は疲れて、母に許しを乞ひ勉強することを誓うが、母は許さない。世間はそれを見て継子虐めだと非難する。長福は仕方なく家を飛び出し乞食をするが、堪え切れず憔悴して再び家に戻る。そこで母は始めて許す。これより長福は見違えるほど勤勉になる。一方長估も又魯鈍で怠惰であった。彼の賭博癖はどうしても直らなかつた。ある日彼は母に、都へ出て商売をしたい、と偽る。すると母は無言のまま彼に金三十両と延金一枚を渡す。彼は喜んで都へ出てその金で娼妓と遊んだが、延金が贖金であつたため、獄に繋かれる。ところで母はこの事を予知して、長福を遣わして長估の釈放を乞わせる。長福はこの時権貴の寵愛を受ける身だったので、すぐに願ひは聴き入れられた。これより長估は家事に精勤するようになった。

この話では、世情と対立して生きる、娘、妻、母として賢明な細柳の姿が描かれる。彼女は良き夫を選ぶために結婚適齢期を過ぎても結

婚しなかったし、夫の葬儀を無事に済ませるために予め棺材を準備しておいた。また世間から梯子虐め、無慈悲と非難されても気にせず、厳しく子供を教育する。

以上の三話はいずれも故意に世情を揶揄し、常識を覆そうとする話ばかりである。そして『聊齋誌異』五百篇ばかりの話はすべてこの三篇と同一の志向をしている。今その代表的な話を全十二巻中より各二三篇引いて大要を記し、そのことを証したい。

〔咬鬼〕(巻1) 鬼怪に迫られて突差に噛みついた人の話。世人に平に見る勇気を称讃する。

〔蛇人〕(同) 蛇の示す友情の篤さを記し、暗に人情の酷薄を揶揄する。

〔三生〕(同) ある縉紳が死んで閻魔から馬に転生させられ、憤慨に堪えず自殺すると、閻魔はその反逆的態度を喜ばず、今度は犬に転生させる。彼はその苦しみを逃れようと死ぬ方法を考えるが、自殺したのではまた閻魔の怒りを買うので、馬車に轆かれて死ぬ。閻魔は非難のしようがなく、人に転生させるといふ話。常識ではなく、患難を経て得た智恵こそ尊ぶべきことを強調する、滑稽譚である。

〔賈兒〕(同) 父にとりついた狐祟を払うため、その息子が密かに狐の動静を探り、毒酒を盛って殺す話。小児が大人以上の智恵を持つ所に、世人を揶揄する意図が窺える。

〔地震〕(巻2) 地震の際に人々が惶て裸で外に飛び出し、裸であることも忘れて互いにその恐怖を語り合う話。危急の際の世人の不用心を笑う。

〔鳳陽士人〕(同) ある士人の夢にひとりの麗人が現われ、彼を

誘惑する。するとそこへ妻がやって来て嫉妬する。さらに妻弟も現われて彼に石を投げつける。そこで士人は夢から醒めるが、妻と妻弟にその話をすると、みな同じ夢を見ていたのだった。悪夢によって、情性的な世俗の夫婦関係を戒める。

〔伏狐〕(巻3) 狐祟を房中術で払うという滑稽な話。その頓智ぶりを讃える。

〔老鸞〕(同) 弓芸を誇る盜賊が、彼より弓の上手な老人に会って敗れたため、傲慢な性格は直り、謙虚な人となる話。世人の輕薄を戒める寓話である。

〔庚娘〕(同) 流賊に迫られた婦人が、落着いて巧みに賊を騙し、遂に殺す話。女性が危急の際に動じない豪胆さを持つところが可笑しい。

〔念袂〕(巻4) 常識に頼る世人の弱みをついた、かたりの巧妙な手口を讃え、さらにそのかたりを騙す狐の賢さを称讃する。

〔螳螂捕蛇〕(巻5) 螳螂が蛇を捕えるという異事を記し、常識を否定する。

〔罵鴨〕(同) 鴨泥棒に鴨毛が生え、夢に神人が現われて、持主に罵られると鴨毛はとれると告げる。そこで彼は持主に自分を罵らせようとするが、なかなか罵らないので苦心する話。人を罵ることも時として善行として認められることを滑稽譚によって説く。

〔魁星〕(巻6) 魁星に似た鬼を見た秀才が、状元及第は間違いないと高を括ったため、落第する。世俗の輕薄な判断を故意に覆す話。

〔林氏〕(同) 女たらしの男が、その妻の乱賊に会って自尽を謀り危うく命を取り留めた節義の正しさに感じて、改心する。しかし

妻は自分に子ができないことを悟り、妾をかうように夫に勧める。だが夫は妻を愛するが余り、聴こうとはしない。そこで妻は密かに侍女を自分の代りに夫の寝室へ送り、後嗣をつくる。後に夫は年老いて後嗣の無いことを悲しむが、妻から実情を聞き大いに喜ぶ。この話では薄情郎の心性と妬婦の無謀を同時に戒める、巧妙な叙述を行なっている。

〔狼〕 (同) 飢えた狼が肉に目が眩んで、木に吊された肉を鉤ごと飲み込み、木にぶらさがって死ぬ話。世俗の無智を狼に寓して笑う。

〔青娥〕 (巻7) 情深い孝行男が、道士から魔法の鏡まがひを借りて、地底まで仙女を追いかける話。情の深さを誇張して描き、称讃する。

〔商婦〕 (同) 商家の婦が幽鬼に誘われて自殺する場面を、偶然その家に忍び込んだ泥棒が目撃する。ところが商家の隣人がこの事件で冤罪を被った。それを聞いてこの泥棒は、自ら役所に出頭して実情を告げる。泥棒にも正義感があると説く所に、作者の反俗意識が窺える。

〔蔵翁〕 (巻8) 漬されたはずの翁が二三年経っても生きており、害を加えた人間に報復する話。一寸の虫の報復の執念を描き、世情の軽薄を戒める。

〔呂無病〕 (同) 驕傲な正妻の虐待に堪え技く妾呂無病の健気さと、誰も相手にする者がなくなつて、始めて後悔して賢婦となる正妻の性格変化の素晴らしさを描く。世間の妻妾の唾み合いを戒しめものである。

〔蛤〕 (巻9) 共生する蛤と蟹があり、その間を絶ぶ糸を絶つと両方とも死ぬ。貞節の堅さを虫けらに求める所に、世俗に対する擲

諷がこめられている。

〔三生〕 (巻10) 閻魔が三生にわたつて仇敵同志の二人を、女婿とその義父に生まれ変らせて和解させる話。わざと滑稽な和解策を提案する所に、世俗の止むことのない仇怨関係に対する作者の憤りが窺える。

〔恆娘〕 (同) 幼い時継母に苛められた狐が、夫の関心を得ることのできない美人の妻に、媚態の作り方を教える話。この狐のごときは世に三姑六婆として忌厭うものであるが、それにも拘わらず作者は、女の媚態にも男心を左右する力があることを示し、既成の道徳に対して肯て反発するのである。

〔男妾〕 (巻11) 美少年を女子に変装させて売る老婆の、美童の佳趣を解しない愚かさを笑う話。

〔車夫〕 (巻12) 荷車を推して坂道を登る車夫を狼が襲う話。車夫が防ぎようのない間隙を狙つて襲う狼の賢さを讃え、暗に車夫の代表する世人が浅見に固執して無謀であることを笑う。

〔鴉鳥〕 (同) 世人が日頃その声を聞くことを忌む鴉鳥が、貪欲な官吏を嘲笑する時、その悪声が美しく力強く聞こえる話。濁世に生きるには、皮相な美意識は通用しないことを強調する。

〔聊齋誌異〕は以上のごとく、肯て常識を無視し、浮薄な世情に堪え得る強靱な精神を礼讃する話ばかりを好んで載せている。

それでは何故にこのように反世俗的な志向をする『聊齋誌異』が生れたのか。私はその理由として、この作品に先行する、李漁の小説『十二楼』『無声戲』の絶大な影響を考慮しなければならぬように思う。

李漁、字は笠翁、蘭谿（浙江省）の人。明の万曆39年に生まれ、清の康熙18年に卒す。著述は独創を旨とし、小説戯曲も多く作り、無官でありながら、その名は一時に轟いた。今彼の小説の若干篇を選んでその四方への影響の大きさを証すことにする。

〔女陳平計生七出〕（「無声戯」） 乱賊に攫われた女性が、毒豆の汁を身体の局部に塗って腫れあがらせ、賊に汚されるのを防ぐ。彼女はさらに賊を村に誘き寄せ、村人の助力を得て殺すという話。世の節婦の徒らに命を落す愚かさを笑い、患難に堪え抜くべき巧智を持つ女こそ真の節婦だと認める。

〔鶴婦楼〕（「十二楼」） 二組の夫婦があり、一組は夫が度重なる出征に会い、妻は悲しみに堪えず死ぬ。もう一組は、夫が出征に当り故意に妻と喧嘩し、妻は夫と別れていても余り心配せず、気楽に暮す。二人が再会した時にはどちらも前より若返っていたという話。乱世を生き抜くためには無慈悲も必要であることを説き、殊更に常識を覆す。

〔十番楼〕（「十二楼」） ある男に九度も縁談がおこるが、一度もまともな女性には回り合えず、全て不具者であった。かくして十度目は再び最初の美人の石女に出会う。しかし男はそれに甘んじ、石女も神力によってまともな女性に変わるという話。殊更に不遇な結婚に堪える男を描き、世の薄情郎を戒める。

〔拂雲楼〕（「十二楼」） 侍女がある才子と結婚するために、主人の娘と才子との縁を取り持ち、事に乗じて自らも彼に嫁ぐ。しかし

嫁いだ後は令嬢のために献身する。作者曰く、「世間には、固より曹操や王莽のような奸智を持ちながら、しかも伊尹や周公のような偉業を行なう者がいます。それはその人の晩節を見ればわかります。」

〔兒孫棄骸骨僅僕奔喪〕（「無声戯」） 老商人が身内の子孫を信じたばかりに彼等から金を奪われ、逆に血縁なき賤しい奴僕が病身の主人の世話に献身する話。極端に真偽を倒錯させることにより、世間の父子の情愛の薄さを揶揄し、貧賤によって人物を評価してはならないことを強調する。

〔美男子避惑反疑〕（「無声戯」） 互いに隣合って家を構える秀才と既婚の美女があった。女は既婚とは言えその夫は白癡であり、まだ床を共にしたことはなかった。そこである時女が隣の秀才の勉強熱心さを賞めると、姑は女と秀才の仲を疑い、女の部屋を移す。すると偶然にも秀才も人の嫌疑を避けようと部屋を移し、二人はまた隣合う。そこで姑は一層二人の関係を疑う。ある時舅は、秀才が嫁の扇子の飾り玉を持っているのを見て、官府に男女の姦通を訴える。後にこの事件は鼠の悪戯であることが判明するという話。作者は、男女の間を疑わざるを得ない諸々の事柄を設定し、徹底的に常識を覆すことに努めている。

以上の作品によって、李漁がいかに世の浅見や軽薄を滑稽な筆致によって嘲笑し、常識に縛られない、患難な世情に堪え得る人間を称讃しているか、そしてそれが『聊齋誌異』の志向といかに一致しているかがわかるであろう。李漁の『十二楼』には順治15年（一六五〇）の友人杜濬の序があり、一方『聊齋誌異』はその自序が康熙18年（一六七九）に成っており、後者は前者に後れること約二十年であ

るが、「聊齋誌異」がほぼ成る（作中には康熙18年以降の話もある）頃まで李漁は生きており、すでに江湖に著名な小説・戯曲作家であったことから推察すれば、「聊齋誌異」は「十二楼」、「無声戲」が白話小説であるのに対して、文言小説ではあるが、その内容から考えると恐らく李漁から大きな影響を受けたであろうと考えられるのである。

さて李漁において反世俗的な小説創作が可能であったわけは、時代が清初の革命を経て文学・史学において見識を尊ぶ風潮が起ったときに当たっていることによるのであるが、それと同時に、何よりも彼が布衣であって文筆で生計をたてていたため自由な発言ができたことにもよるのであろう。蒲松齡についても李漁と似たようなことが言える。彼は野に在ったがために、朝廷の俸給を受けて保身を計る官吏とは違って、権威を振り回すばかりで無能な官吏や庶民を、徹底して揶揄することができたのである。そこで次に蒲松齡が李漁文学の影響を受け、反世俗を標榜する作品「聊齋誌異」を著した必然性を、作家の平生を通じて探ってみたい。

三

まず蒲松齡の生涯をその略年譜によって概観したい。

明崇禎13年（一六四〇） 山東省淄川県に生まれる。

清順治15年（一六五八） 博士弟子員（生員）に補せられ、その才分は

当時の名士施閏章に認められる（しかし一生科擧に及第せずして終わる）。

16年同郷の王鹿瞻・李希梅・張篤慶等と「郟中詩社」を結ぶ。

康熙3年（一六六四） 李希梅家で読書する。かくて科擧の勉強のか

たわら詩文の創作にも励むことになる。

- 9年 同郷の孫憲が宝応県（今蘇省）知県に任ぜられ、松齡は幕賓として招かれる。
- 10年 帰郷。
- 11年 同郷の畢際有家に招かれる。これより淄川を長く離れることはなく、畢家に永く身を寄せ、家塾の教師をする。
- 18年 「聊齋誌異」自序成る。
- 21年 廩膳生に補せらる。
- 22年 「婚嫁全書」（日用書）成る。
- 23年 「省身語録」（同前）成る。
- 25年 張曜（字右年、仁和の人）、淄川県知県に任ぜられ、淄川の流弊を改め、善政を行なう。松齡はこの人物を高く評価している（28年に改任される）。
- 26年 郷試に落第する。
- 27年 「族譜」を修す。
- 28年 王士禎「池北偶談」（巻五）成る。
- 29年 郷試に落第し、応擧を断念する（前野直彬「蒲松齡伝」は、これ以後も応擧を続けると考証する）。
- 35年 「懷刑録」（日用書）成る。
- 36年 「小学節要」「宋七律選」成る。
- 43年 「日用俗字」（日用書）成る。
- 44年 「農桑經」（同前）成る。
- 45年 「菜譜書」成る。
- 48年 「齊民要術」（同前）成る。
- 49年 郷貢生となる。張篤慶・李希梅と共に郷飲介賢に推擧される。漕糧經承康利貞の汚職を摘発する。

54年（二七一五） 76歳で死去。

蒲松齡は淄川土着の人であり、また生涯殆ど生地を離れることなく過したので、郷里に対する愛着が強かつたらしく、「婚嫁全書」

「省身語録」「懷刑錄」「日用俗字」「農桑經」「藥崇書」「齊民要術」などの俗向けの日用教科書を作っており、実用を重んじる傾向を示している。例えば「循良政要」（咸立年代不明）は、淄川の風俗の実情を示し、官吏にその理解を要求するものである。今この作品の中より若干条の項目を挙げれば、

弭大盜 盜賊を捕えるべき官吏が却って盜賊を恐れ、被害に遭

つた者を救うべきであるのに逆に仇視する。

治小盜 泥棒を捕えるべき捕吏が却ってその配下になり、贖物

を分け合っている。

禁賭博 捕吏が博徒と結託している。

清保甲 夜警の役人が反対に民を脅かす。

解逃人 逃亡者が言い遁れをする。

いずれも、常識に頼る凡庸な官吏ではよく把握することのできない狡猾な世情を暴露し、官吏に世の中の実情に明るくなることを要請するものである。

また人としての在り方を説いた日用書に、「為人要則」（咸立年代不明）がある。その自序に、「王八孩兒、世情の薄きに感ずる有り。十二題を命じて余に文を爲るを属し、以て子弟に教えんとす。亦た其の憂患の心を見る。遂に率かに之を撰す」とある。ここにその若干条を記す。

正心 凡そ人は……その一念（邪念）が初めて萌すときには、自分でその邪であることを自覚するので、すぐに心を転じ、

邪念が起ればすぐに消すようにしなければならぬ。

立身 立つとは卓然として自ら樹つことである。つまり仇怨の叢に於て身をしっかりと立て、風波の中でも脚をしっかりと立てることである。

徙義 為すべきことを見ればすぐに取り掛り、決してぐずぐずしない。

急難 凡そ一日交わりを結べば生死をかけて守り、労も厭わず怨も避けない。

救過 忠告善導してこそ良友だ。けれども燥熱の中で忽ち冰雪を澆げば、豁然として悟ることは勢であるが、佛然として怒ることもまた常である。もし（友人が）我を徳とせず、却って我を仇とするようになれば、その感いはまだ解けていないので、深く弁じることが止めて身を保って退くべきである。（友人は）その興尽き悲しみ起り、時運窮まり禍至れば、きつと涙を流して、「私は某の言を早く聴いておれば、きつとこんな事にはならなくて済んだのに」と言うだろう。この時に至って自分は友の失敗に胸を痛めるが、友情には愧じないのである。

輕利 凡そ人は何事にも利を頼む。貧乏であれば父母は子と認めないし、富貴であれば親戚は畏懼する。それは利を重んじるからである。……私が思うに、人に物を貸す者は、それがきつと戻らないと思うことだ。もし戻れば捨い物と考えればよいし、たとえ戻らなくても、固より期待していないので何でもないのである。

このように浮薄な世情を否定し、それに堪えてゆくための、常識

以上に厳しい友情の在り方を説くのであるが、これらの教条は「聊齋誌異」中の話を彷彿させるものがある。

この他、雑文「淄邑流弊」では、明末に始められた一条鞭法（税制）が今日弊害となつてゐることを説いて、「天下民を害するの政、多く仁人より起る。何を以ての故ぞや。当年廉者之を創りて以て民害を除くは、故より仁政と爲す。後世貪者之を借りて以て民財を罔すれば、故より流弊を成すなり。」と言ひ、「禁糶説」では、米の買入れ制限による悪弊を指摘して、「事は仁人君子の事爲るに似るも、其の実を究むれば、乃ち毫も益無くして大いに害有る者は、則ち歴來各省州県の禁糶の令、是なり」と喝破する。いずれも仁政を標榜して実は庶民の利ならぬ悪政を暴露したものであり、著者の自らを含めて庶民の実益を重視する考えが窺われる。

また書簡においても、郷紳に対して、その奴僕や族人の横暴を止めさせるように勧告したり（「上孫給諫書」）、里甲制度の乱れに乗じて里役が官の威勢を頼んでのさばることを訴えたり（「均里甲議、寄王公書考獻明經書」）、郷邑の漕糧役人の不正を發き、郷紳たちが彼を匿まうことを戒しめたり（「与王司寇」、「与孫文文軒示具県公」、「与張益公同上譚無競進士」）してあり、著者が布衣であつただけに、官吏や郷紳とは違つて、鋭く世情の核心を把握していることがわかる。

その他友人の家庭争議の調停にも尽力しており、例えば、郟中社の同人で恐妻家の王鹿瞻の腑甲斐なきを憤り、妻に内緒で病父を迎えに行くように諭したり（「与王鹿瞻」）、沈徳符に対して、松齡が沈家の財産相続問題に干渉しているとの流言飛語を否定し、沈徳符の猜疑深さを非難したり（「与沈徳符」）している。

また同族間の内紛にも心を勞わし、「族譜」を修訂している。その序文を左に記す。

万曆間、閔邑の諸生、食饌する者八人、族中六人を得たり。嗣の後科甲相繼ぎ、貴顯は崔盧に及ばずと雖も、而れども望族を稱する者、往往にして之を指屈す。豈に宗支の敦睦なるを以て家声を墮すこと無きに非ずや。其の後に及んで稍や陵夷衰微す。卑者は其の貴を挾んで以て尊を凌すべく、小者は其の富を恃んで以て大を加うべし。能く族人を虐して自ら命て英雄と爲し、甚しきに至つては相妬むを喜び相慶ぶを災とす。閔牆は之有るも禦侮は則ち未だし。

以上の日用書や雑文・書簡等を通じて言えることは、蒲松齡は生涯生れ故郷で暮し、また生涯官に就くこともなかったため、郷邑の流弊を身をもつて知り、それを忌憚なく暴露することができたということであり、またそれと同時に、流弊に対処するすべを知らず、見識を持たない郷紳や庶民を非難し、乱世に即応する新たな道德のあり方を呈示することができたということである。

蒲松齡が李漁の寓意小説の方法を取り入れたのは、まさにこうした彼の平生の問題意識と関連があり、決して気紛れに故事を集めたのではないことがわかる。

因みに「聊齋誌異」とそのすぐ後にできた王士禛（字貽士、号阮亭、山東省新城の人。崇禎7・一六三四～康熙50・一七一二）の「池北偶談」とを比較すれば、前者に世俗を嘲諷する意図が濃厚であるのに対して、後者は鬼物の情を記すことにより耽美的傾向を示しはするが、反世俗的な志向は殆ど見られない。これは王士禛が刑部尚書にまで陞進した大郷紳であり、およそ蒲松齡のような貧乏な秀才の庶民的感觉

に対して、同情こそすれ全く理解の気持がないことを示していると言えよう。壬士植は『聊齋誌異』に讃評を載せており、蒲松齡は彼の代筆をしたり、自作の詩文に対する評や跋を載けており、二人の交情は篤かったと考えられるのであるが。）

結 び

『聊齋誌異』は従来小説史上で明確に位置づけられることなく、ただ莫然と、不運の秀才が理想郷を描いたとか、志怪・伝奇のスタイルを擬ねているに過ぎないというふうにしき扱われることがなかった。しかしこの作品が生まれたのは、決してそのような消極的な理由からではない。そこには南方の李漁文学の影響があったし、また郷邑における流弊と戦う、土着の無官の人の姿があったのである。私はそこで、『聊齋誌異』を、清初の寓意小説として小説史上に位置づけたい。

注

(1) 拙論「李漁の反俗精神について」(『東方学』第53輯)において、李漁をとりまく文人、周亮工・馮如京・杜濬らにおける、自らの見識を尊ぶ文学風潮について略述したので、それを参照されたい。

(2) 直野直彬著『蒲松齡伝』(昭和51年、秋山書店)の「蕭櫞の変」の頃は、これについて詳述する。

テキストとしては、『聊齋誌異』十二巻附録一卷(『会校会注会評本』)(張友鶴編校、一九六二年、中華書局)、『蒲松齡集』(『路大荒編』、一九六二年、中華書局)を使用した。